

令和 2 年 12 月 4 日

## 会議宣言

### ICRP 原子力事故後の復興に関する国際会議 福島及びこれまでの事故から学ぶ放射線防護の教訓

本国際会議は、国際放射線防護委員会（ICRP）が主催し、日本原子力研究開発機構（JAEA）が日本側の主催者として、令和 2 年 12 月 1 日から 4 日までオンラインで開催され、世界中の科学者、専門家、自治体・規制当局者、専門職者、市民が参加しました。100 カ国以上から 2000 人以上が参加登録し、130 以上の発表が行われました。

本国際会議のホームページでご覧頂けるように、日本及びその他の多くの組織が支援機関そして後援機関として列記されており、また世界中から多くの関心が寄せられていることは、本国際会議のテーマの重要性を明確に示しています。

本国際会議では、多くの人々が未解決な複雑な問題をよく理解し、将来の事故の備えのために、原子力事故後の復興に関する個人的および専門的な経験を共有しました。

また、国際原子力機関（IAEA）、経済協力開発機構/原子力機関（OECD/NEA）、原子放射線の影響に関する国連科学委員会（UNSCEAR）、および世界保健機関（WHO）などの政府間組織にも、それぞれの意見を表明頂きました。

この 4 日間に本国際会議で講演頂いたことを繰り返すことは致しません。本国際会議で行われた全ての発表が記録されていますので、それぞれのセッションを再聴講頂けます。プロシーディングスは、Annals of the ICRP に掲載されます。代わりに、本会議のいくつかのテーマについて述べます。

本国際会議の重要な目的の 1 つは、日本の復興状況についての理解を深めることでした。本国際会議で聴講したことをまとめます。

- 東京電力福島第一原子力発電所事故が発生してから約 10 年は困難な時期でしたが、多くの地域で進展が見られました。原子力発電所の状況は安定しており、廃炉については大きな進展がありました。公共の場所では、広い地域が除染され、ほとんどの避難指示が解除され、自宅に戻った人々を支援するために、日常生活に必要なサービスが復旧されました。しかし、多くの未知なことや障害、特



に差別などが、被災地での生活や仕事を決意した住民の方の前にあります。また、避難し、様々な理由で被災地へ戻らないことを決心した住民の方、まだ決心されていない住民の方にとっては、置かれている状況は容易ではありません。また、「帰還困難」区域も残っています。

- 規制当局によって迅速に実施された防護措置は、事故の影響を受けた人々の被ばくレベルを十分に低く保ち、直接的な放射線影響はこれまで観察されておらず、将来観察される可能性は低いと考えられます。しかし、いくつかの不確実性が残っており、多くの人々が、特に子供や妊婦の方に関して、将来起こりうる影響についての懸念を抱いています。潜在的な放射線の直接的な影響を超えて、ライフスタイルの混乱は、特定の一般的な疾病の増加、そして福島で影響を受けた人々の精神に顕著な影響を及ぼしました。あきらめや無関心から不安やうつ病に至るまで、事故の心理的影響は多くの人々の生活の質に永続的な影響を及ぼします。人々の心身の健康の不確実性と混乱の両方によって特徴的な状況において、福島県民健康調査を含む被災地での包括的な健康状態の把握は、公共機関が長期的に優先事項として取り組むべき事項であることが示唆されています。
- 福島第一原子力発電所の修復は、詳細な中長期ロードマップで、厳重に管理されています。原子炉の解体作業は、残留放射線量が高いため、遠隔操作装置の分野での膨大な研究開発によって着実に進んでいます。
- 近い将来の廃炉の主な課題は、環境への排出を回避するために、長期間にわたって蓄積されている水の管理です。水中の放射能を大幅に低減するための処理後、蒸発による大気への放出と海洋での希釈という2つの技術的解決策が提案されています。日本の専門家はこれらの処理方法に関する研究をし、どちらも人間の健康や環境に悪影響を及ぼさないと結論付けました。しかし、様々な観点からは、経済的、社会的影響についての懸念が残っています。これを踏まえ、規制当局は、遅滞なく開始するために、透明性が高く、多元的で協調的な意思決定プロセスを確実に行うことが提案されました。
- 何度か言及されていますように、今日の福島住民の方々にとっての重大な困難は、放射線リスクの一般的な理解を超えて、未来の共通のビジョンの欠如です。これにより、状況について話し合い、残りの課題を克服する方法を見つけることが困難になります。大部分の人々は、規制当局が復興プロセスに完全に参与しており、計画があることを知っていますが、その開発と実施に関連していないため、この計画が彼らの期待に合致できていないところがあります。



将来を見据えて、本国際会議は、復興を加速する戦略を検討し、将来起こりうる大規模な原子力事故からの復興への準備に必要なことを改善することも目的としています。本国際会議で取り上げられた、将来にとって最も重要ないくつかのテーマに焦点を当てます。

- 大規模な原子力事故は、個人や地域社会の生活のあらゆる側面に影響を与える社会の崩壊を引き起こす可能性があります。事故の特性によっては重大な健康への影響が生じる可能性があります。そうでない場合でも、社会的、環境的、経済的影響が広範囲に及び、長期にわたるものであり、状況の複雑さを考えると、これらすべてに対処するのは困難です。これは、事故が起きる前に、ステークホルダーを巻き込んだ準備の必要性を強調しています。
- 世界中の専門家と協力して 10 年近くにわたって作成された、新しい ICRP Publication 146 の大規模原子力事故後の人と環境の放射線防護は、規制当局、事業者、及び事故による影響を受けた人々の直接の経験に基づく教訓を反映しています。間違いなく、まだ学んでいない教訓はありますが、この勧告の目的は、環境への重大な放出を伴う原子力事故への対応と準備に関する勧告とガイダンスを提示することです。
- 福島事故とチェルノブイリ事故の両方の経験から、大規模な原子力事故後には、放出された放射能は長期間にわたって環境中に留まり、意図的な行動と自然のプロセスによって徐々に減少することが示されています。これは、規制当局が住民と地域社会を防護し続けるために、事故後数年、さらには数十年の間、いくつかの行動を維持しなければならないことを意味します。また、地域社会を支援するための新たな対策や被災地の人々の生活環境の改善を実施する必要があります。
- 本国際会議は、規制当局の必要不可欠な行動が、復興過程において事故の影響を受けた人々が中心にいることを覆い隠してはならないことを強調しました。影響を受けた人々は、復興状況に何らかの形で関心を持っており、避難者も被災地へ残るあるいは戻る決意をした人々の両者とも、落ち着きを取り戻すことを熱望しています。放射能の存在を考えることが住民の方々のルーチンの一部になったとしても、通常の仕事に戻り、自分達の日常生活のことを考えられるようになることが期待されています。
- 福島県内のいくつかのコミュニティの経験は、以前のチェルノブイリにおけるコミュニティと同様に、事故の影響を受けた人々に復興過程に加わって頂くことで、住民の方々がそれぞれの生活環境を取り戻すことのできることを示しています。専門家、規制当局、地元の専門家、および影響を受けた住民間の協力（ICRP が共同専門知プロセスと呼ぶもの）は、人々に自分自身と愛する人を防護するた



めの意思決定の自律性を与える実用的な放射線防護文化を構築するための実証されたアプローチです。経験によれば、放射線防護はそれ自体が目的ではなく、個人の幸福や生活の質に関係なく、被災地の生活条件を改善するために使用される必要があります。この改善は、復興過程の結果として現れる個人および集団のプロジェクトを支援するために、規制当局、コミュニティ、および事故の影響を受けた人々自身の共同の約束によってのみ達成することができます。この支援は、包括性、透明性、説明責任、警戒、公平性に基づく社会的および経済的活動のガバナンスの枠組みの中で行われなければなりません。これは人間の尊厳と倫理的義務の問題です。

- チェルノブイリ事故から 30 年以上、福島事故からほぼ 10 年が経過した現在、復興過程は長い道のりであり、必然的に数世代にわたって継続されることは明らかです。この状況において、事故の記憶は、記念であるだけでなく、次世代の意識を高め、すべての人の注意を維持し、未来の構築に貢献するための生きた想起させるものとしても役立ちます。学校や大学への教育制度の関与は、その経験を次世代に伝え、復興の精神を維持するための重要な方法です。この経験の伝承は、将来の原発事故が発生した場合の復興への備えの原動力となります。原発事故を回避するためのあらゆる努力にもかかわらず、原発事故の可能性を排除することはできないからです。
- チェルノブイリ事故の影響を受けた地域、そして最近では福島事故の影響を受けた地域での過去の経験は、被災地での共に生活していく将来に関しては、復興状況の複雑さのもとでは、必然的に存在する多様な考えを和解することは、すべてのステークホルダーとの対話を通じて可能になることを示しています。また、将来の共有ビジョンを構築すること、防護措置やその他の社会的、環境的、文化的、経済的活性化プロジェクトを推進する価値観と原則を特定すること、そして、このビジョンを達成するために協力することは、関係者全員で対話を通じて行うことができます。

